



## タンザニア漫遊記 (その1)

山田 章雄

60代も後半になり古希が近づくとつれ、昂じた趣味のバードウォッチングもあまり遠出できなくなるのではないかと、ふと思うようになった。まだ体の動くうちに残された大陸のひとつであるアフリカを訪れようかと、かみさんと話したのはおよそ一年前のことである。中米コスタリカ探鳥旅行から帰国してすぐだったように思う。なぜアフリカなのか。これまでに出会った外国人にバードウォッチングの話をする、大抵「アフリカはすごいぞ。アフリカに行つてはどうか」と勧められてきた記憶があったからだ。ただアフリカにはマラリアや黄熱、アフリカ睡眠病だの、厄介な感染症があることや、これまで出会ったアフリカ出身者の英語がわかりづらかったこともあり、些かの不安感が先だつてしまい、なかなか踏ん切りがつかなかった。ボツワナやガーナからの留学生が帰国しているので、そのあたりはどうかなどと漠然と考えていたところ、かみさんから「タンザニアにしようよ、よさそうな現地ツアー会社を見つけたい」といわれ、タンザニアについて調べてみた。サファリで有名な

セレンゲティヤンゴロンゴロを有する東アフリカの国であり、かの有名なキリマンジャロ山の麓あたりで探鳥ができるらしい。ツアー会社は「Tanzania birding and beyond Safari」、ホームページを見る限り悪くなさそうだといいこと、見積もってもらうことにした。現地10泊で、5か所の国立公園等を巡るプライベートツアーで、各箇所2泊するので、割と余裕がありそうだ。ということでこの会社をお願いすることにし出発は2019年12月7日と決めた。

予約金も支払いを済ませ、航空券の手配も終えたころ、4月からお手伝いをするようになった国立研究法人日本医療研究開発機構(AMED)の仕事で、ケニア訪問をすることになってしまった。ケニアはタンザニアの隣の国で、セレンゲティ国立公園はケニアのマサイマラ国立公園と地続きである。しかも時期は10月。1年の間にしかも僅か1か月の間隔で、アフリカ大陸を2度も訪問することになるとは、全く予想できないことが起きるものだ。

### 旅の準備

先にも書いたようにアフリカ旅

行で最も気になるのは感染症である。公衆衛生に関わる身としては、感染症に罹患し生き恥をさらすのだけは何としても避けたい。タンザニアは黄熱の流行国とはされておらず、ワクチン接種は義務付けられていない。しかし隣国のケニア入国にはイエローカードの提示が必要だ。AMEDの仕事ではこれからも途上国を訪問することが多いとのことで、AMED負担で、黄熱、破傷風、A型肝炎の予防接種を受けることになった。黄熱は、60歳以上は慎重投与ということで若干不安もあったが、接種部位の発赤・硬結が認められはしたものの何とかクリアできた。破傷風と肝炎に関してはそれぞれ2回、3回の接種が必要なため、タンザニアに向けて出発する時には肝炎の免疫は十分ではなかったことになる。ワクチンで予防可能な疾患はまだいいが、問題はマラリアである。「アフリカ訪問後マラリアを発症して死亡した例を知っている」などと脅かす友人もいて、マラリア対策だけはしっかりしなければならぬ。幸い(?) AMEDの仕事はマラリア関連プロジェクトだったため、マラリア専門家か

らのアドバイスも得られたが、基本はやはり、自己責任で己を守るしかない。ケニアも、タンザニアもマラリア浸淫地であるということで、DEET 濃度の高い防虫薬の準備、Insect Shield なるブランドの防虫ネット素材のヤッケ、蚊取り線香、携帯用電気蚊取りなど、考えられる限りの対策グッズを準備した。もちろん蚊取り線香点火用のライター、電気蚊取り用の乾電池なども忘れるわけにはいかない。更に内服マラリア予防薬の準備も必要だ。私の用意したマラロンという予防薬は、流行地に入る前日から投与を始め、滞在期間中並びに流行地を離れてからさらに7日間、内服する必要がある、1日約500円、2週間程度の旅行だとおおよそ17,000円の出費となる。これに反して、かみさんは別の医療機関で日本ではマラリア予防薬としては未承認のドキシサイクリンを処方された。こちらは未承認のくせに極めて廉価で、1日当たり約26円に過ぎない。節約家を自任する（あえてケチとは言わないが）かみさんにとっては歓迎すべきことらしく、鼻を膨らませて(?)喜んでいた。

これで疾病対策は万全となったので、渡航準備を進めることになる。航空券の手配はかみさんが済ませた。今回は結婚40周年ということや出発日がかみさんの誕生日ということもあり、清水の舞

台から飛び降りる覚悟で、カタール航空のビジネスを使うことにした。チケット購入後5か月も過ぎただろうか。AMEDのケニヤ行きの航空券を探しにカタール航空のサイトに入ったところ、なんと我らの払った金額よりはるかに廉価で販売しているではないか。手元の電卓を使うまでもなく、キャンセル料を差し引いても買い替えたほうがお得。早速解約と再購入をしたことは言うまでもない。次はビザである。ケニアもビザが必要だが、オンライン申請できるし、しかもAMED出入りの旅行代理店が代行してくれたので楽勝だったが、タンザニアは大使館まで出向く必要がある（現在はオンラインも可能になったそうだ）。ケニア出張から戻った10月末くらいに、まずかみさんが申請書一式をそろえて大使館に申請に向かった。帰宅後の感想は「かわいい大使館だったよ」だった。10日後に受け取りには私が向かった。世田谷区最寄駅から徒歩15分程の、馬事公苑近くの住宅街に建つ大使館は貧相ではないものの、小規模で確かにかわいらしい。黒塗りのアルファードが駐車しているところが大使館であることを、控えめに物語っている。入り口を入るとこれも小さな受付があり、そこでビザ受領に来た旨を告げるとほとんど待たされることもなくビザが貼付されたパスポートを返却

された。

さあ、これで準備万端だ。

## キリマンジャロ国際空港へ

ケニア行きはドバイ経由のアラブ首長国連邦のエミレーツ航空だったが、今回は同じ中東の産油国であるカタールの航空会社で、ドーハ経由である。いずれも世界の人気航空会社で、価格の割に行き届いたサービスで定評がある。今回は清水の舞台から飛び降りてしまったこともあり、ドーハまでは「Qスイーツ」と呼ばれるシートである。座席はいわゆる2-2-2の配置で、各座席の入り口にドアがついており、「Don't Disturb」サインまで用意されている。非常時のドアの開け方が記載された案内が用意されている。私たちは通路に挟まれた隣り合った席で、ドアを閉めると2人だけの空間が演出される。もちろん上は開いているのでCAや通路を歩く乗客からは丸見えではあるのだが、プライバシーが保証されたような錯覚を味わうことができる。シートもフルフラットになるので、普段は機内では一睡もできない私ではあるが、今回はかなり良質の睡眠を楽しむことができた。ただその分映画を楽しむ時間が失われてしまったが、それくらいの犠牲は仕方ない。ドーハでの乗り継ぎは4時間強あったため忙しくもなく、問題なく過ごせた。空港は巨大なだけ

や、スーパーカーのディスプレイもあり、誰もが金持ちになったような錯覚に浸ることが可能だ。

ドーハ発キリマンジャロ行きは使用機体の到着が遅れたため、予定より1時間ほど遅れた。普通ビジネスの客は優先搭乗なのだが、どういうわけか、このフライトでは後回し。早く乗ればシャンパンを心置きなく楽しめるのになどと、愚かなことを考えながら待つ時間は苦痛にさえ感じられた(?)。ドーハを離陸後まもなくして人工島に建てられたスカイスクレーパーを一望できた。いよいよアフリカ大陸だ。このフライトは往復ともQR1357となっている。不思議に思っていたところ、どうやらドーハ、キリマンジャロ、ダルエスサラーム(タンザニアの首都)、ドーハと一回のフライトで回っているらしい。

事前に、着陸時左側にキリマンジャロ山が見えるとの情報を握っていたので、我々は左側窓側の座席を確保していた。キリマンジャロ空港へ降下を始めたころ、左側に雄大な山容が見えてきた。カメラを取り出し、その姿を静止画だけでなく動画に収めた。しばらくたったころ、前の席の男性が「あれがキリマンジャロだよ」と突然話しかけてきた。彼の指さす方向は我々が見ていた山よりさらに前方だった。山はほとんど見えず、雲に覆われていたがそこに山らし

いものが隠れているようには思われた。我々が一所懸命になって写真に収めていたのはメルー山であり、キリマンジャロ山は雲の中だったのだ。

### アルーシャ国立公園

日本のローカル空港よりも小規模な国際空港から最初の宿には、舗装道路を30分ほど進んだのち、でこぼこのダートを15分ほど走って到着。敷地内を川が流れるなかなか瀟洒なロッジである。当初の予定ではガイドのアントニーはこのロッジで落ち合うことになっていた。しかし空港に迎えに来たドライバーが宿に向かう途中の車内で、アントニーからの電話に出るという。大体アフリカ人の発音はわかりにくいのに、電話なんてとんでもないと思ったが、出ないわけにもいかない。電話に出るとアントニーが、「今日はホテルに行けなくなった。勝手に夕食をとって今日は休んでくれ。翌朝、朝食を済ませた後、ホテルで会おう」のようなことを言ってきた。反論する余地もなく、ロッジへのチェックインをガイドなしで行うことになってしまった。確かコスタリカでも同じような目があった。敷地内のバードウォッチングで夕食までの時間つぶしを始めたところ、ロッジの従業員らしい若者が、「こっちに猛禽がいるよ」といって案内してくれた。何とサンショクウミワシがいるではない

か。写真を撮りまくって楽しんだが、あとで何回も出会うことができるとは想像もできなかった。

宿でアントニーの案内でアルーシャ国立公園に行ってきたという初老のアメリカ人に会った。ヒヒや野鳥の写真を見せてくれ、「彼は最高のガイドだよ。アルーシャ国立公園は素晴らしいところだよ」と教えてくれた。南アフリカ産の赤ワインとともに楽しんだディナーにも満足し、翌朝からのサファリに備え早めにベッドに入る。

時差ボケもなくスッキリと起きることができ、朝食を済ませてガイドのアントニー、ドライバーのゲイタンと合流。車はランドクルーザーを改造したサファリ専用車(写真1)。アントニーの説明ではピックアップトラックの荷台を切り離し、客席のある後部となぐらしい。ウェブで検索するとトヨタのタンザニア工場で生産しているという記事もある。どちらが本当かはわからないが、サファリカーのほとんどはランクルだ。昔はランドローバーもあったらしいが、以前日本で所有していた時に壊れてばかりいたという私の経験を話したら、二人とも大笑いしながら納得していた。さあ、いよいよアルーシャ国立公園を皮切りに、ンゴロンゴロ保全地域、セレンゲティ国立公園、ヌデットゥ保全地域、マニャラ湖国立公園、タ



写真 1

ランギーレ国立公園を巡るサファリツアーの開始だ。それぞれについて書きだすとページがいくらあっても足りそうもないので、幾つかのイベントを紹介するにとどめることにする。

### セレンゲティ国立公園の大渋滞

最初の訪問地アルーシャから次の目的地セレンゲティ国立公園までは360km程のロングドライブだ。そのかなりの部分は国立公園の敷地内だ。途中鳥見をしながら進んでいたが、多分到着時間を考えてだと思うが、だんだんと鳥見に割く時間が短くなり、遂に殆ど路傍の鳥には見向きもしなくなった。16:00を回ったところだったか、セレンゲティ国立公園のゲートで「あとどれくらいかかる？」と聞いたところ「少なくとも2時間」との答えが返ってきた。公園の広大さをつくづく実感させられはしたが、あと2時間くらいなら暗く

なる前には到着できるのでまずまずだなと思った。しかし、その時である。目の前に10数台の車が停車しており、我々の車も停車を余儀なくされた。ライオンでも出たのかと思って見ると、そうではなく、行く先の道がスコールによる増水で水没して進めないというのではないか。12月は普段なら乾季に入るはずなのだが、この地も多分に漏れず、気候がおかしいらしい。問題は迂回路もないので、ゲイタン曰く「水が引くま

で待つのみ。何時間かかるかは神のみぞ知る」。そろそろビールのど越しが恋しくなってきた頃なので、いつになったら水が引いてドライブが再開できるのかは、言ってみれば死活問題である。周りは猛獣の棲息地なので、迂闊に車外に出て歩き回ることもままならない。1時間ほど経過した時に、何やら動きがあるような気配がした。遙か前方の車を双眼鏡で覗くと（バーダーの必需品がこんなところでも役に立つ）、どうやら先頭車が渡り始めたようである。真夜中の晩餐や朝食兼のディナーだけは避けることができたようだ。川の流れの中を進み、目的地のクブクブロッジに到着したのはまだ明るいうちだった（写真2）。

（次号に続く）

（日動協ホームページ、LABIO21カラーの資料の欄を参照）



写真 2